

自慢する

陽羅 義光

『論語』は孔子の言葉を弟子たち（顔淵、子貢、子路等々）がまとめた書物である。

現代でも通じる、示唆に富んだ言葉がいくつもある。

いつ読んでもいいし、いつまでも読んでいい。

孔子は直裁に教えるのではなく、例え話や歴史的逸話や比喻などで伝えるのを得意とした。

それは孔子の穏やかで慎ましい人柄によるものだろう。

【子いわく、孟之反はほこらず。奔って殿たり。将に門に入らんとしてその馬にむちうちていう、敢えておくれたるには非ず、馬進まざるなりと。】

（孟之反は勇士、殿は「しんがり」のこと。負け戦でのしんがりはもっとも困難で勇気のいるもの。実際敵は、この必死の抵抗に恐れをなして逃げた。孟之反は手柄を自慢せず、あえてしんがりをかけてでたのではなく、馬が遅いのでしんがりをするほかはなかったと冗談まぎれに謙遜したのである。）

これは感動的な逸話ではある。

けれども、穿った見方をするならば、孟之反があくまでも謙遜でそう云ったことはみんなが（少なくともこの戦争の作戦に加わっていた幹部クラスは）知っているはずだ。

もしそうでなければ、孔子の耳にも届かなかったはずだから。

となると、逆に考えれば、この「冗談まぎれ」も、結果論で云うなら「自慢」に等しいことになる。

それならば、余計なことは云わずに、黙っていたほうがよいという意見もある。

あるいは直裁に自慢したほうが、豪傑らしくて面白いという意見もある。

これは遠い昔の話ではなく、現代の話として引きつけると案外興味深い問題を孕んでいる。

会社内におけるこの種の問題は、簡単そうにみえて、実は簡単ではな

く、会社内に大きな波紋を広げることが往々にしてある。

自分の手柄を自慢する社員が必ず嫌われるのは、その社員の自己主張（自己PR）の強い性格が嫌われているのではない。

会社の仕事はチームワークが基本だから、その社員の上司は「俺が引き立ててやったから手柄を立てられた」と思い込んでいるだろうし、その社員の部下は「僕が補佐したから手柄を立てられた」と感じているだろうから、まずはその連中に嫌われるのである。

関係のない部署の連中も、（自分のことならともかく）他人のこととなれば、その上司やその部下と同じ視点に立つから、やはりその社員を嫌うのである。

つまり「俺が俺がの、鼻持ちならぬ最低な社員」というレッテルを貼りつける。

結局その上司もその部下も、関係のない部署の連中も、本質的にはその社員同様（もしかすると内に籠もっているだけ余計に）自己主張の強い性格だということになる。

それならその社員は、その手柄を黙して語らず、黙々と仕事をしていればいいのかとなると、それこそ経営者の思う壺となる。

日本に限らず（現代に限らず）一般に経営者というものは（例外はあるにしても確率的に云って）社員が黙々と仕事をしていれば、給与面でも待遇面でも環境面でも凶に乗って締め付けてくるもの（少なくとも改善なんかしないもの）だからである。

百歩譲っても、「これでいいのだ」と思い込みたがるのが経営者というものだ。

だから社員の（自慢話はもちろん）自己主張は、己の弱い立場を守る手段の一つなのである。

労働組合など無い、中小の会社の社員はなおさらである。

社内においては自分を立て、社外においては上司や部下を立てる。

これがサラリーマン道なのだが、前者ばかりを見て後者を見ないと、その（人間の価値はともかくとして）会社員としての価値なんか解らぬものだ。

（自己主張が内に籠もるタイプではなく外に表出するタイプである）その社員は（その上司やその部下とくらべて、はるかに弁が立つのだから）

ら) それくらいの要領も心得ているはずなのだ。

少なくともその社員は、その上司やその部下とくраве、会社にとって
はるかに必要な人材であることは間違いない。

昔から「預言者故郷に入れられず」と云う。

周りにすぐに解ってもらえる人物なぞ、たいしたことがないという意味だ。

(外に表出する) 自慢たらたら人間は、最初は、付き合っていたた
しかに気持ちのよいものではない。

しかしもしこちらがそういう次元に居る人間でなかったなら、自慢た
らたらを茶化して遊ぶことも容易のはずだから、慣れれば、けっこう面白
いつきあいができるはずだ。

けれども(内に籠もった) 自慢たらたら人間は(本質的に嫉妬心と
僻み根性の強烈な人種であるから) 付き合っていて、後で、間違いなく
後悔する。